デイパックで出かけよう

"フットパス"発祥の地・英国事情

カントリーウォークはイギリスの国民文化

新しいカタチの歩き旅として最近耳にするようになったのが「フットパス」という言葉だ。発祥はイギリス。その定義と楽しみ方、可能性を、英国のフットパス事情に詳しい東京農業大学の栗田和弥さんに聞いた。

⬆農場などの私有地でも昔から存在する道では歩く権利が保証されている。多くの人が週末にさまざまなカントリーウォークを楽しむ。

栗田和弥さん

1967年生まれ。少年期を欧州で過ごし英国もたびたび旅行。フットパスの楽しみを知る。東京農業大学地域環境科学部造園科学科自然環境保全学研究室講師。

➡牧場の中を通るフットパス。柵には扉が付いている。通った人は家畜が逃げないようにきちんと締めるのがマナーだ。

近年、新しいアウトドア用語として耳にすることの増えた「フットパス」。イギリス式の歩き旅らしいが、そもそもトレッキングやウォーキングとどう違うのか？　英国のフットパス事情に詳しい東京農業大学講師の栗田和弥さん（42歳）は、次のように説明する。

「フットパスは歩くための小径（こみち）という意味で、そうした道を歩くことをフットパス・ウォーキングといいます。公園の遊歩道、農道、登山道や海岸線・川沿いの道を含め、人が歩くために作られた道はイギリスではすべてフットパスと呼ばれます。こうした道のことをアメリカではトレイルと呼び、ニュージーランドやオーストラリアではトラックというのが一般的です。

イギリスで特徴的なのは、そうした小径がとくに農村部にたくさん張り巡らされていることです。英国ナショナルトラストや、日本の文化庁に相当するイングリッシュヘリテイジが管理する自然遺産や文化遺産とともに、地域ごとのフットパスが地図やガイドブックによって詳しく紹介されています」

●歩く権利の獲得から誕生

フットパスの起源は400年以上前にさかのぼる。16世紀ごろから、農業の生産性を高めるためにエンクロージャー制度が始まった。所有者の明確でない開放地を私有地化できるというものだ。当然ながら資産階級に有利な制度である。あらゆる土地が所有権を示す生垣や柵で囲われた結果、不都合が起こった。そこで暮らす普通の人々が道を自由に歩けなくなったのだ。

「強い批判を受けて、たとえ私有地であっても誰もが通れる法律ができました。土地の所有者は、歩く人の便宜もはからなければなりません。たとえば牧場の柵には扉を、垣根にはステップを設けて通り抜けられるように整える必要があります。

そうした田舎道をのんびり歩くことが、余暇時間の増大とともに国民的な楽しみになりました。とにかくイギリスの人は歩くことが好きですね」

アメリカのトレイルは、どちらかといえば自然を命がけで開拓した時代の道や、今なお残る原生自然を楽しむ道で、距離が長いことが特徴だという。

「イギリスにも、ローマ帝国と北方民族の勢力争いの境界となった『ハドリアヌスの長城』を伝うような距離の長いフットパスがあります。山や高原地帯を抜けるフットパスもありますが、多くの人たちは郊外の田舎を歩きます。自然を失う重大性に最初に気づいた国だという歴史性もあるのかもしれません」

産業革命と連動した農業革命